

今号の作業

フロントフォークに フロントダンパー(左)を取り付ける



今号ではフロントダンパー(左)を組み立て、前号までに組み立てたフロントフォークに取り付ける。ダンパーシャフトにはグリスを塗布し、その粘性を利用した「フリクションダンパー」として機能するので、完成後もリアルな可動が楽しめる。

今号のパーツ



- ①フロントダンパー(左)×1
- ②フロントフォークブーツ×1
- ③フロントフォークリブ×1
- ④ビス(Eタイプ)×2
(※1本は予備)
- ⑤フロントフォークボルト
ヘッド×1
- ⑥グリス×1

※フロントフォークブーツ向けの指定はありません。

※モデルの設計上、パーツの形状が実車とは異なる場合があります。
※「組み立てガイド」で紹介しているパーツは実際に付属するパーツと一部仕様が異なる場合があります。

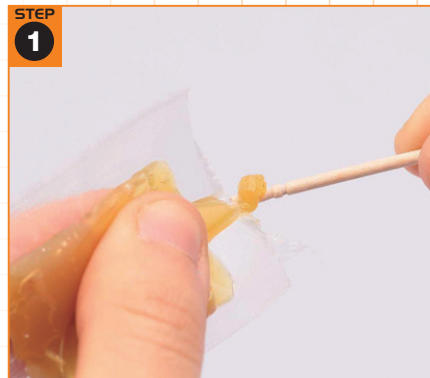
使用する道具

- ・+(プラス)ドライバー(1番)
※グリップ部が細いタイプと太いタイプの2種類があると便利。
- ・つまようじ(先端が細い棒状のものであれば代用可)

用意するもの

- ・トップブリッジ(4号で組み立てたもの)
- ・フロントフォーク(5号で組み立てたもの)

STEP
1



⑥グリスの袋の端を少しだけカットし、つまようじの先端に盛り付けるようにして取り出す。

STEP
2



完成済みで提供される①フロントダンパー(左)の接合部分(黒い樹脂製パーツと、メッキ処理されたダンパーロッドの合わせ目)にグリスを塗布する。

STEP
3



メッキ処理されたダンパーロッドには、細い溝が開けられているので、その中にグリスを“詰め込むように”塗布する。残ったグリスは次号以降でも使うので、袋の端をセロテープなどで留めて中身が出ないようにしてから大切に保管しておこう。



フロントダンパー(左)の本体部分とダンパーロッドを持ち、数回伸縮させる。こうすることによって塗布したグリスがダンパー内部に塗り広げられる。



②フロントフォークブーツを用意し、フロントダンパー(左)のダンパーロッド側から差し込む。フロントダンパー(左)の本体上部には段差が設けられているので、フロントフォークブーツを段差まで押し込む。



③フロントフォークリブを、フロントダンパー(左)のダンパーロッド側から差し込む。フロントフォークリブの側面には段差があり、径の小さい側から差し込む。



フロントフォークブーツにフロントフォークリブをはめ込む。ダンパーロッドには“平らに加工されている部分”があるので、フロントフォークリブをゆっくりと回しながら、位置を合わせて差し込むようにする。



平らに削られた面を外側に向ける。

前回の作業で組み立てたフロントフォークを用意し、写真のように左ウインカーを上にして持つ。ダンパーロッド先端の側面には、平らに削られた面があるので、それを外側に向ける。



ダンパーロッドの先端部分をフロントフォーク左側に差し込む。フロントフォークブーツ部分だけを持つと抜け落ちてしまう恐れがあるので、フロントダンパー(左)の本体ごと握って作業するようにしよう。



ダンパーロッドを奥まで押し込む。フロントフォークを上から見ると、穴の形状が「D」の文字のように加工されているので、そこにダンパーロッド先端を差し込む。



第4号で組み立てたトップブリッジを用意し、フロントフォーク上面との接合部分を確認する。写真に示したように、フロントフォークの左右が、トップブリッジ裏面の左右両端にある円形のくぼみにはめ込まれる。この時、左右ウインカーを破損しないよう十分に注意する。コードを断線させる恐れがあるので、ウインカーを取り外すことはお勧めできない。



フロントダンパー(左)が抜け落ちないようにしっかり保持したまま、トップブリッジをフロントフォークにセットする。この時、メーターケースから出ている2本のコードを挟み込まないように、写真のようにトップブリッジの裏面中央に寄せて後ろ側に出しておく。



④ビス(Eタイプ)を用意し、トップブリッジ上面の左側にあるビス穴にセットする。ハンドルバーが邪魔になる場合は、真上から見て作業しよう。



1番の+(プラス)ドライバーを使い、ビス(Eタイプ)をねじ込む。ダンパーロッド先端中央のビス穴はタップが立てられているので、スムーズにビスをねじ込むことができる。



ビス(Eタイプ)をしっかり締め込んだら、⑥フロントフォークボルトヘッドを用意する。裏面には六角形の突起があるので、ビス(Eタイプ)を組み付けた六角形の穴にセットする。



フロントフォークボルトヘッド裏面の突起が穴の形状に合うよう位置を調整し、真すぐに押し込んで固定する。

今号の完成



これで今号の作業は完了だ。フロントダンパー(左)が備わったことで、より一層のバイクらしさが漂ってきた。ライト類を点灯させるコードを傷めないよう注意し、次回の作業まで大切に保管しておこう。